広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	”構え”の学習の試み ： ソメコとオニを材料として
Author(s)	小泉，節子
Citation	児童の言語生態研究 , 5 : 46 - 51
Issue Date	1972-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045059
Right	
Relation	

●授業記録

〝構え〟の学習の試み

――ソメコとオニを材料として――

小泉節子

資料

ソメコとオニ　〈斉藤隆介作〉

1

ソメコは五つだ。ソメコは毎日タイクツしていた。おとなたちは、なんてつまらない毎日を送っているんだろう。

ソメコのように、いっしょうけんめいに遊んだり、生きたりしているものは、だれもいない。

ソメコが、少しおもしろくなって、少しむちゅうになると、おとなたちはもうへいこうして、

「ソメコ、あっちゃ行って遊べ。良い子だからナ」

って言って、行ってしまう。お父ウもおっ母アも、兄ちゃんも、姉ちゃんもそうだ。村のおじさん、おばさんたちは、遊んでくれさえもしない。顔を見ると

「あちサ行け、あちサ。ひとりで遊べ。良い子だからナ。おばさんは仕事でいそがしいんだ。」

そう言う。

2

ところがある日、ソメコといくらでも遊んでくれるおじさんが来た。ソメコは門で、草をつんでいた。草はごちそうだ。草ッ原はおざしきだ。

「いただきます。なんと、ほんじつはいいお天気で。まず、えんりょなくあがってたんセ」

ソメコが一人で遊んでいたら、

「なんと、ごちそうさんであんす。せば、えんりょなく、頂くス」

そう言って、ひとりのおじさんが前へ座りこんだ。少しどこやら、こわい顔をしているんだけど、ソメコはよろこんじまって、泥のおダンゴまですすめてしまった。

「まンず、まンず、ごはんがおすみなンしたら、このダンゴもひとつあがったんセ」

「ヘイヘイ、ムゴムゴ、ム、これはンマイ、これはンマイ！」

どこかこわい顔をしたおじさんは、ンまそうに泥ダンゴを食べるマネまでしてくれた。

3

こうしてソメコは、オニにさらわれて、オニの岩屋まで来てしまった。

ソメコは、ウチのものに離れてタッタ一人岩屋に連れて来られても、泣いたりなんかしなかった。

それどころか、

ーサア、おじさんとふたりッきりで遊べるソ！

と、はりきっていた。連れて来られた珍しい岩屋の中は、あちこちにロジや横丁があって暗くって、なんかおもしろいことが、一ぱいありそうだった。

「ナ！　おじさん！　今度はカクレンボするベェ！」

「だめだ。おれは手紙を書くんだ。おまえ一人で遊べ。」

「テマギなんか書くより、カクレンボのほうがおもしろいソ、テマギやめてカクレンボするベェ！」

「いやだ、だいじな手紙書くんだからな、おまえあっちで、一人で遊べ」

「フーン、テマギ、だれに書くんだア！」

「おまえのお父ウにだ。」

「なんて書くんだア？」
「金の俵を一ぴょう、馬に積んで岩屋の前にとどければソメコはかえしてやる。もしとどけねば食っちまう、オニより、ってな。」
「フーン。じゃあ早く書いちまえ、そして早くカクレンボしよう！」
「おれはオニなんだぞ。おまえ、おれがこわくねえのか？」
「ン、こわくない。カクレンボしよう！」
「フー……　ヨオシ！」
オニはもう、めんどうくさくなっちまって、ソメコが泣いたってかまわないと思って、人間の姿をやめてオニの姿にかえった。
「アーララ、アララ、おヘソが見えら！」
ソメコは、虎の皮のフンドシ一枚のはだかのオニの姿を見て、キャッキャと笑った。
「ナ、おまえ、オニならオニゴッコしよう！サ、おらが逃げるから早くおらをつかまえれ、サア、オニサンコチラ、手ノ鳴ルホウエ！」
ソメコは、チッチャイ手を、ピチャンピチョンと打って、オニのまわりをチョコマカとはねてまわった。
岩の机の前に座っているオニは、やかましくって手紙なんぞ書けはしなかった。

4
ソメコがいなくなって、大さわぎして探しているソメコのお父ウのウチへオニから手紙が来た。それにはこう書いてあった。

1　資料の適用

この物語は
1　ソメコの日常生活
2　日常生活内のある日、オニであるおじさんとソメコが遊ぶ。
3　こうしてということで、オニにソメコがさらわれる。
4　オニがソメコの家に手紙を出す。その手紙文

という構成である。1、2、3というふうに徐々にソメコに対する裏付けが出てくる。1の日常生活を読み取っていれば2、3のオニとソメコの行動がうなずける。
場どりと時間どりは次のようになる。
1―2　3　4　1と2は大きく切れる。しかし、2と3はおじさんをこうしてという文からオニと読み取った子どもは場面的には変化を見るが時間的接近を思う。123までの場どり、時間どりがどのように理解されるかは、最後の手紙により見ることができるとしてよいであろう。
この手紙を子ども達が書くことにより、子どもたちの場どりとこの物語の印象のまとめ方がどういうプロセスにあるのか見ることに関して、この資料を使う。

2　授業方法

一時間目：4の手紙文だけを伏せておき、子ども達にソメコとオニのプリントを与え手紙文を各々書く。書いた手紙文を読み自分と他の人とどこがちがうかを検討する。又、他の人の手紙文を聞くことにより、手紙文の書きなおしを望む者は書きなおしをする。
二時間目：子ども達の手紙を同傾向別にわけ、それに従って机も並びかえ、意見を交換することにより、意見の変更をも認める前提をして次の五つの発問をして、結果を次々に表に記号でもって掲示する。
発問（原文を閉じさせたまま）
①「ソメコは毎日たいくつしていた」という文章は1～3のどこに入っていましたか。
②「ソメコのように、いっしょうけんめいに遊んだり、生きたりしているものはだれもいない」という文章はこのお話の中にあったでしょうか、あるなしで答えなさい。
③2のおはなしはどんなおはなしだったか、思い出して、次にいうどれだか言って下さい。
①ソメコとおかあさんが遊んだ話
②ソメコとおとうさんが遊んだ話
③ソメコとおじさんが遊んだ話
（①～③までを選択させる）
④2の話の中にオニはあらわれていますか、いる、いないで答えなさい。
⑤（原文を開かせる）
3の終りに、「岩の机の前に座っているオニは、やかましくって、手紙なんぞ書けはしなかった」と書いてありますが、4にはオニから手紙が来たと書いてある。
では、・A_1群の人は、ソメコが静かにしていたので、手紙が書けたということになりますね。
・A_2群の人は、〃うるさい〃という文章が入っている人達だから怒ってその目的をさらに強調したということになりますね。
・B群の人は相変らずうるさかったから、もう手紙の目的などどうでもよくなって、ということで手紙を書いたことになりますね。
自分がオニの立場にたって手紙を書いた時、ソメコがどうしたから書いた

のですか。

①静かになったから

②落ち着いて手紙が書けず怒ったから

③相変らず、うるさかったから

（①～③までを選択させる）

3　授業記録

於玉川学園小学部四年竹組

（A～Dは群　デ：でたらめ　（）内は人数）

	A_1 (14)	A_2 (8)	A_3 (3)	B_1(2)	B_2(1)	B_3 (3)	C(1)	D(1)	デ(1)
問1	① 全員	① 全員	①①①	①①	①	①①①	①	①	／
問2	○ 全員	○ 全員	○○○	○○	○	○○○	○	○	／
問3	③ 全員	③ 全員	③③③	③③	③	③③③	③	③	／
問4	○○○○○ ○○○○○ ×××××	○○○○○ ○○×	○○×	××	×	○○○	×	×	／
問5	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 △3 △3 △3 △3	1 1 1 2 2 2 △3 △3 △3	2 2 △3	△3 △3	△3	△3 △3 △3	1	△3	／

○結果分析

A群　目的にこだわっている型

A_1：目的そのもの　（十四名）

○金の俵を一俵馬に積んで岩屋の前まで持ってこい。持って来なければソメコは食っちまう。もってくればソメコを返してやる。それも十二時までに持ってこなければ、やはりソメコは食っちまうぞ。（三浦大紀）

A_1の、表の選択を考えてみると、次の四通りがある。

(1) ①○③○①　1－2→3→4

(2) ①○③×①　1→2－3→4

(3) ①○③○△3　1－2→3－4

(4) ①○③×△3　1→2－3－4

A_1は、はじめオニが書こうとしていた手紙文と同じ文面である。ということはオニはソメコにあまり、おびやかされることはなかった。つまり、ソメコが静かになったということになる。すると、発問五の答としては①が選択されるのが妥当である。③は同文を書く裏付けにはうなずけない。この手紙文からするとオニには心の変化は全く見られず、事をそのまま行ったことになる。とすると、三場面と四場面との間には全く時間の経過はなしとして良いだろう。それは、オニとソメコとの関係がそれほど親密ではないことになる。つまり、三場面のみでオニの存在を知るという方が、こうしてはとれていないとしても、この文の理屈は通る。(2)が一番筋道が立っているとしていいだろう。

A_2：目的強調型（八名）

ソメコという、うるさいやつは俺があずかっている。返してほしかったら、金の俵を一俵以上、岩屋に持って来い。持ってこなかったら、ソメコの命はないぞ。しめきりはきょうだ。うるさいから早く持って来い。耳のこまくが破れそうだ。（蜂須賀洋子）

A_2の解答から考えられる組合せは六通りある。

(1) ①○③○①　1－2→3－4

(2) ①○③×①　1→2－3－4

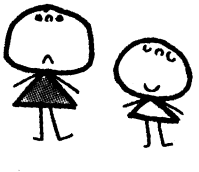
(3) ①○③○②　1－2－3→4

(4) ①○③×②　1→2－3→4

(5) ①○③○③　1－2→3－4

(6) ①○③×③　1→2－3－4

A_1とA_2の違う点はうるさいからという点を強調して、それ故、早く俵を持って来てくれといっている点にある。故に、発問の答としては、問5の答は②とするべきである。つまり、うるさい、今もうるさい故に早く持ってきてくれという文面になるはずである。すると三場面と四場面の間に時間の経過は考えられない。①を選んでも③を選んでも、その子供の中には時間の経過が存在する。静かになったから、という①と相変らずうるさかったからという③とには当然そうなることはまぬがれない。またオジサンの存在とオニの存在を見抜けない子供には、うるさいというソメコのイメージは三場面のオニとソメコという関係のみにとどまる、それではソメコと、オジサンの関係どりとまた、こうしてさらわれたということをうして全く子どもは捉えていないということになり、うるさいイメージが半減してくるわけである。故に、このA_2における手紙文から矛盾しない解答は(3)のみということになる。



A_3　（三名）

金の俵を一俵馬に積んで岩屋の前に届ける。そうすれば、ソメコの命は助けてやる。それから早くしろ、そ

うしないとこっちが殺されてしまうからな、それからもしソメコが助かって、家に帰ったら、ソメコと遊んでやれ、そうしないとおまえ達をたべるぞ。わかったな。（宮川恭子）

A_1、A_2、と同様に目的は同じ所にあるが、遊んでやれ！という文章が入っているので、他とは違う型として抜き出してみた。結果を見ると、次の四通りがあった。

(1) ①○③○② 1－2→3→4
(2) ①○③×② 1→2－3→4
(3) ①○③○③ 1－2→3－4
(4) ①○③×③ 1→2－3－4

A_3は一応わけたがこの場合は目的強調型と同類にしても良いように考えられる。遊んでやれは、うるさくてしかたがないの裏に出てきた言葉であると取れる。そう考えてくると当然(1)以外は理屈に合わなくなる。

B群は全くA群とは逆の手紙文になっている目的を放棄していると考えられる。まず、その中でも$B_1B_2B_3$と、少しずつ内容の違うものはわけて発問をしてみた。

B_1（二名）

おねがいだ、ソメコを取りに来てくれ。とてもうるさいのだ。ソメコは遊びたくってしょうがないらしい。岩屋でまっているから取りに来てくれ。うるさくってしょうがないんだ。おねがいだ。（山田尚子）

これは二名とも

①○③×③ 1→2－3－4

三場面と四場面との間に時間の経過をみている。それがために放棄したことになると考えられるが、問5で③の相変らずソメコがうるさかったからを選ぶ裏付けとしては、二場面のオニの存在を見落している点から弱くなってくる。二場面・三場面のオニとソメコとの関係から、相変らずが生れてくると考える方が妥当であろう。論を立てるとしたら少し説得力が弱くなる。

B_2（一名）

今、わしの家にいるソメコを引き取りに来い。でないとわしは、からかわれているようでいやなんだ。是非たのむ。

①○③×③ 1→2－3－4

B_1と全く同じ選択をし、読み取り方をしている。文面から考えると、二場面のオニとソメコの関係不明確により、三場面に固執しているように見うけられる。そこから、からかわれているという言葉が出ていると考えられるが、そうするとソメコに対する理解度がうすく感じられ、かたよりが見られる。

B_3（三名）

金の俵を岩屋にもって来い。ソメコは元気すぎるから、とてもうるさいぞ。おれは死んじまいそうだ。もしソメコを引き取るなら、こっちが金のたわらをもっていってやる。（田中さと美）

これは解答が三名とも全部一致している。

①○③○③ 1－2→3－4

二場面と三場面との関連性をよくとらえ、ソメコとオニとの結びつきをより強く理解している。従って問5に於て、相変らずソメコがうるさかったからという③の理由を選び、その必然性より三場面～四場面への時間経過を感じ取り、目的放棄文へと続いていったと考えられる。B群に於ては文面とその理由が一番つじつまが合っている。

C群（一名）

ソメコはうるさいなぁ、ソメコは遊びたいといっている。もしこれから遊ばなかったら食っちまうぞ。（寺田嘉樹）

①○③×① 1→2－3－4

C群は、超越型かそれとも、ただ単に、うるさい遊んでやれ！ という文面を書いたのかこの文だけでは理解できなかった。だが、この表の解答で、A_1と同じ発想から書かれたものであることがうなづけた。それはオニの存在が取れていない所から二場面と三場面が離れてしまい、静かになったという問5の①の選択から、3から4までに時間の経過をおいている。あまりソメコとオニを理解していない点から、①を選んだというのは妥当のように考えられる。

D群（一名）

わしはこんなにうるさい子供だとは知らないで、岩屋まで運んできた、早くソメコという子供をもっていってくれ。そうしたら、お礼に金の俵を持って来てくれ。（曾田 緑）

①○③×③ 1→2－3－4

ソメコがオニをおびやかしているのを三場面のみとらえてしまっている。その結果、三場面に固執することにより、目的そのものの手紙文から、抜けきることが出来なかったのではあるまいか。そしてさらに、この場どりの弱いということは、問5で③を選択した結果、時間の経過を三場面と四場面に感じている。相変らずうるさいというソメコの行動の裏付けが、三場面のみということになると根拠として弱くなると考えられる。

4　追跡調査

調査方法

(1)　自分の書いた手紙を書きかえたいと思う人

(イ)　書きかえの文章を書いて、それがA_1→Dのうちのどれに入るか考えて下さい。

(ロ)　いつ自分の考え方がおかしいのではないかと思ったのですか？表の質問のときだとしたら問一〜問五のいつですか。ひとつでなくても良い。

(ハ)　また、表の質問のときだとしたら、それの理由を書いて下さい。

(2)　今までの自分の考え方で良いと思う人

(イ)　表の発問のうちいつ正しいと思ったか、問一〜問五のうちから選びなさい。一つでなくても良い。

(ロ)　その発問で正しいと思った理由を書きなさい。

調査人数　三十四名中二十六名

調査結果とその考察

①手紙文を変えた子どもの調査結果とその理由考察

	理　由
A_1→B_1　問五	ソメコの態度がオニの心を変えさせたのではないか。
A_1→B_1　問五	ソメコはうるさかったからそのことを直接手紙に書いたのだと思う。
A_2→B_1　問一	ソメコはとてもうるさいしいつもたいくつだったから、またちがうオニが来てひどいめにあうかもしれないから。
A_2→B_3　問五	①の人がずいぶん多かったから。 B_3の人のが面白かったから。

この結果次の二点が考えられる。第一は群がA群の目的そのものまたは目的強調からB群の目的放棄へと移動している。第二は転向のきっかけとして全員が問五をあげていることである。これらの二点、そして理由内容から考察すると転向のきっかけは問五、そして、問五により自分自身の構を理論づけられたと考える。はじめて自分の立場の構えを理解し転向を考えたのだと思う。そこには自分の立場の構えの理解と同時に他の構えの理解も可能となったのであろう。それが、第一点にかかげた大幅なA→Bへの変化をうながしたと考えられる。また理由の中でN君は、ソメコの態度がオニの心を変えさせたのではないかとして、この構成後のオニとソメコの心情の振れ合いまで思い及んでいる。またTさんの場合はB3の人がおもしろいとして理由を述べている。おもしろいとする裏にはいろいろな構えを見抜いているとして良いのではないかと考えられる。

②手紙文を変えない子どもの調査結果と考察A_1から順に行っていく。

A_1（十四名中調査した人数九名。うち二名転向、同じ七名）

(a)①○③○①問五　ソメコをつれていったのだから、ゆうかいになるとしたら、テレビみたいな手紙になると思った。

(b)①○③○①問二　ナシ

問三

(c)①○③×①問四　オニが出て来たとの答をこないにしたこと。

(d)①○③○①問四　ナシ

(e)①○③○①問五　オニがうるさいソメコにいかったから手紙が書けなかったわけじゃぁないし、相変らずソメコがうるさかったから手紙が書けたわけじゃない。静かになったから手紙を書いた。

(f)①○③×①問四　ナシ

問五

(g)①○③×③問五　ナシ

A_1は問五－四名・問四－三名とやはり問五が多い。内(e)（三田）は問五の発問により整理された頭で、自分の道筋に理論立てをしている。他の構えも認めつつ考えていると見てよいだろう。しかし(a)（今泉）のテレビみたいな：としている子供は、自分の考えの中にとじこもりその肯定のみを考えている。他の(c)(b)(f)(g)は理由づけが出来ていないのかどうか未定の状態である。

A_2（計八名）同じ三名　無記三名

転向二名

(a)①○③○①／

(b)①○③×①問五　ナシ

(c)①○③○①問五　なんとなく正しいと思ったから。

A_3（計三名）同じ三名

(a)①○③○②問五　私の手紙は遊んでやっているという手紙。

(b)①○③○③問三　おとうさんと、おかあさんが遊んでやっていないと書いてあったから問三。

(c)①○③×②問五　オニはソメコが、あまりうるさいから、ソメコの親に

手紙を書いたんだと思う。

A_2とA_3に於て問五－四名・問三－一名と、問五に固っている。A_3の(c)（宮川）もやはり問五の発問によって自分の頭の整理が出来たようである。

B型を考えてみると、

B_1（二名）同じ二名

(a)①○③×△　ナシ

(b)①○③×△質問　相変らずソメコがをするうるさくて困った前からから。

B_2（一名）同じ一名

(a)①○③×△問五　「アーララアーララおへそが見えらぁ」でからかわれている。

B_3（三名）同じ三名

(a)①○③○△問四　／

(b)①○③○△問四　別になし

問五

(c)①○③○△問一　ソメコがそんなにたいくつしていたならオニの所で大さわぎをするはず。

問五－二名・問四－一名・問一－一名と、問五が多い、B_1は二人ともオニの存在を認めていないで質問の前からとしているところをみると、相変らずうるさくてということで、ソメコのうるささからあの手紙文を書いたということになる。あとどりが出来ているようにはうかがえない。B_2は、やはり予想通り、三場面のオニのセリフにとらわれている。そのとらわれた心持ちで手紙を書いていると見受けられる。B_3は問四・問五ではっきりと自覚を増したようである。場面取り、時間どりのつじつまは合うが、理由がはっきり述べられていないのは、はっきりわかってしまい必要性を感じていないのか。ただ(c)（小山内）は、問一としているにもかかわらず、オニの所で大さわぎをしたはずであるから相変らずうるさくしていたので、こういう結果となったというわけで問五をも含めているのではないかと考えられる。

C　（一名）同じ一名

①○③×①問四　問四でオニではなく、おじさんではないか。

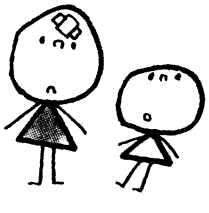
予想通りの理由づけであったように思われる。オニがおじさんのふりをしているという文面に気がつかず、またオニとの関係のみで一場面にとらわれていることが明白である。

転向・同文の理由のきっかけとなった発問の集計とそれに対する考察

問一－二名　問四－六名

問二－一名　問五－十四名

問三－一名

圧倒的に問五が多い。授業中に子供に問五の発問をした折に、「そうだ」「そうだったのか」という声があった。これは自分では無意識のうちに書いた手紙の裏付けを問五の発問でしてもらい、自分の頭の中を整理することができたためであろう。オニになって自分が手紙を書いているという意識すら薄い子供もいたようだ。また、こうしての取れている子供が意外に少ない。文と文のつづきに使われる時間経過の最も初歩的な接続詞であるにもかかわらず、見落してしまっている子供が多い。それは、1、2、3、4とわかれている文章であるという意識からかもしれないが、前文のオジサンという文章に押されて、逆よみが出来ていないといえよう。〃オニの姿に返った〃という文章からオニの登場が以前にあると考えてよいはずである。四年の段階では、こうしてをつかみ、自分の構えと相手の構えとを見きわめ、そして、その構えに対する論を打ち出し、考えられる子供は三十四名中八名（B_1五名、B_3三名）とわずか二割という結果である。

＜安易に読みとばしている子供は、しっかりとした論理のくみ方が不可能である。逆に、自分の書いた手紙がどういう自分の頭のプロセスにより書かれているものかを見ることの出来る子供は、他の頭のプロセスをも同事に捉えることが可能である。そういう子供は、ソメコとオニとの関係も自然と読み取りが可能となるのである。それの良い徴候としてはA_1型↓B_1型へ転向した子供の理由の中に、「ソメコの態度がオニの心を変えた」というのがある。文の構成がどうなり、自分はどのように、その構成を見、構成に参加したかということを目的としなければ、このような教材はあってもなきがごとしということになる。一つの正解を求めているのではない。自分自身の文章が、どれだけ見え、また他の文がどれだけ見えているか、ということを明確にさせてやることができればと思うだけである。＞